

信毎俳壇

坊城 俊樹 選

春眠や行きつ戻りつ三途川 (長野市) 中沢 義寿
 腕白の春泥を跳ぶ野良の径 (長野市) 甲中 重実
 たんぽぽやかたて駄菓子屋在りし場所 (長野市) 清水美佐子
 春泥の道引き返すハイヒール (長野市) 松本 宏要
 花なすな故郷への径通かなり (松川村) 岡 豊村
 鳥雲は祖父のステッキ英國製 (飯山市) 甲中 琢雄
 幾度の思ひ切る春ありにけり (佐久市) 西田 和彦
 幼日の故郷ありて蒔の藁 (下條村) 福嶋田鶴子
 境内の骨董市を覗れり (松本市) 辻 佳代
 外灯のすべて膝に里の村 (信濃町) 松本 信子

佳作
 十間に脱く運動靴に蓬の香 (埼玉県上尾市) 小村 勝子
 車椅子押しして静かに青き踏む (原村) 加藤津恵子

選評

一句目、春眠とはまこと快いものだが三途の川を行ったり戻ったりしたという。生死の境と思うと大変だが、それほど幽玄な夢の世界に引き込まれたということだろう。二句目、腕白であるからこ

そ跳ばねばならない。春泥ごときを避けてしまつたら腕白の名が腐るのである。三句目、幼い頃通っていた駄菓子屋はもう店じまいをしてしまった。その跡地にはただ寂しいタンポポが咲く。

今井 聖 選

母からの包みに毎花林糖 (駒ヶ根市) 服部 信彦
 ほたん雪フォトスタジオの赤き椅子 (佐久市) 竹内 勝代
 喋ることのほかには能なし春の雪 (佐久市) 西田 和彦
 ものの芽や友は何処に輪廻せむ (佐久市) 西田 和彦
 雪しろを分けて木曾川奈良井川 (上田市) 竹内 重美
 藪貫ひに伊那駅伝の道をゆく (箕輪町) 向山 政俊
 低山に集ふ爺盛福寿草 (伊那市) 中村 茂子
 春の雪迷いながらの着地かな (佐久市) 赤岡 厚子
 春泥を背負ひ駆け抜く男の子かな (佐久市) 水間喜美子
 風船の行方やデパート店仕舞 (佐久市) 木内利一郎
 入学式教え子のゑる保護者席 (上田市) 武田 夢子
 夜校の見ゆる一階に家族呼ぶ (中野市) 茅川 菊水

佳作
 入学式教え子のゑる保護者席 (上田市) 竹内 創造

選評

一句目、爺と花林糖に母の心尽くしがうかがえる。母にとってわが子は幾つになつても子どもなのだ。二句目、雪の白と椅子の赤の対照が鮮烈。「フォトスタジオ」にもモダンな語感がある。三句

目、どこか喋れたのではないかと思うほどいつまでも喋り続けている人がいる。自戒を込めてとこの句は言っている。四句目、友の死は悲しいものだ。こういうふうには頼って納得するしかない。

神野 紗希 選

徘徊も旅する心蝶の屋 (箕輪町) 向山 政俊
 花吹雪オランウータン眠たきよう (立科町) 村田 実
 雪吊りの独みし池の真鯉かな (岡谷市) 吉池富貴勇
 初蝶を見た少年駆けつけてくる (佐久市) 栗林 貞夫
 オカリナのさくらさくらや童天に (佐久市) 岩下サク江
 割箸を社長にさぐらや新社員 (長野市) 原田 浩生
 蟹クリームコロッケ爪付き花見 (小諸市) 加藤 陽介
 鮎一つもう桜咲く上野駅 (長野市) 大島 昇
 影深き横石古墳返る (須坂市) 東島 雄二
 風になるつもり春の散歩かな (千曲市) たじまたける

佳作
 風光る古民家カフェのヒーフ丼 (佐久市) 篠原 文男
 イチゴ好きに向けて友の初彼岸 (伊那市) 竹松 徳門

選評

一句目、近所をぶらぶらするのも、あるいは認知症の徘徊も、旅をしたい心の表れなのかも。蝶に誘われ、もう少し歩きたくなる。二句目、桜の散るひかりに春の眠気が暮る。オランウータンの表

情に人間も深く共感。三句目、雪吊りが緩み春も近づけば、真鯉ものびのびと泳ぐか。真鯉を定点とすることで、広い園全体が一句に収まった。四句目、季節の発見に息弾ませる少年の純真がまぶしい。